

シニアネットワーク連絡会セッション

福島若者は原子力に何を感じているか～福島夢と課題～

Feeling of Fukushima's young generation on nuclear –Dreams and Issues–

(3) 若者から見た将来の原子力について

(3) Viewpoint of young generation on future nuclear field

*嘉齊 澤¹¹福島工業高等専門学校 ビジネスコミュニケーション学専攻

1. 無知の知

まず、原子力を専攻していない筆者が原子力分野に関わるきっかけをお伝えする。カナダに留学にした際に、カナダ人の友人が福島には人が住んでいるのかと聞いてきた。当時、情報の格差の大きさに愕然としたことを覚えている。それと同時に、確固たる証拠や自信を持って福島が安全であることを説明できなかった自分の無知さに情けなさを感じた。この出来事をきっかけに福島県民として原子力について知るべきであると思い、学校の選択授業や課外活動で原子力に関わるようになった。

原子力分野での活動を始めて明らかになったことは、学生の意識の差である。筆者が在籍する福島高専には原子力人材育成の授業やプロジェクトなどが多数存在し、学生は自由選択式に参加することができる。進路として原子力分野を選択していく学生の多くは、このような機会を生かし多くのことを学ぶ。しかしその一方で、このような事業に対してやや消極的である学生もいる。彼らには目の前に山積している問題が見えていない。実際に、学生を対象に行った除去土壌問題についての認知度調査では、一部の学生から「知らない」などの回答があった。福島県内の至る所にある黒い袋が日本において大きな問題になっていることを彼らは知らないのである。福島から距離が離れるほど、原子力問題は他人事のように扱われている現状はいまだ払拭されていない。距離に伴って情報は希薄になっていき、やがては届かなくなる。情報格差は国境を越えればさらに大きくなる。そして無知の状態は「原子力＝事故」という負のイメージが誇張されるのを助長していると考えられる。この格差を小さくしていかなければ、負のイメージ払拭は困難であると考えられる。

2. 原子力分野に必要なこと

他の学生と共に原子力分野のプロジェクトに参加していく中でわかったことは、原子力分野の抱える問題の複雑さである。原子力という言葉聞けば、物理や化学などの専門を想像する者も多いと考える。しかし、原子力の抱える問題は技術だけではなく、社会的・経済的側面における課題もはらんでおり、原子力の問題に関わる全ての分野による包括的なアプローチをかけなければ、建設的な議論が実現しないと考えられる。筆者は、情報格差をなくし、福島の現状や原子力についての理解を醸成するためにコミュニケーションという側面から貢献しようと努めた。これは、他の技術系の学生とは異なる視点からのアプローチであるとともに、人々の理解を得るには非常に重要な役割を担うことができたと考える。その逆も然り、技術の知識を持たない筆者は技術系の学生から原子力の安全性などに関してより広い知見が得られ、情報により信頼性を持たせる事ができた。

今後原子力分野において必要なことは、学生への教育であることは明白であるが、原子力に関する教育は技術系の学生のみが対象になるべきではなく、経済や経営、社会学、法学、心理学など一見係わりの内容な学問からの学生をも巻き込み学際的なディスカッションを実現することが重要であると考えられる。カリフォルニア大学では類似した取り組みが行われており、他分野の学生による議論が実現している。このような学際的かつ国際的な議論により、課題へのアプローチの幅や奥行きが変わっていくと考える。このような議論が実現し、多くの若者たちが目の前の問題を可視化できる日が来ることを信じて今後も活動を続けていきたい。

*Mio KASAI¹¹National Institute of Technology, Fukushima college